



最近のメディアから発せられる情報は、インターネットとリンクして世間への拡散能力や影響力が増大している。社会が混沌としている現在、情報を受け取る側も心の許容範囲が狭くなり衝動性と過激さが増している。一方、自主規制という名のもとに、伝えるべき情報を伝えないメディアの萎縮や劣化も指摘されている。メディアも人々も白か黒か、善か悪かの二分法的思考に陥ってはいないだろうか。

読んだ方もおられるだろうが、近頃の週刊誌の医療関係の情報は扇動的である。「医者」と病院にダマされるな!」「医者」に言われても断ったほうがいい薬と手術」「医者」がすす

## 医療情報リテラシー

—何を信じ何を伝えるか—

情報広報部長

山科 賢児

めてもやっつてはいけない手術、飲んではいけない薬」は掲載記事のタイトルである。読んで仰天した方も多いだろう。記事の内容は、治療手段である薬や手術に対する分かりやすい情報だが、一種の洗脳に近い。頻度の低い薬の副作用をすべての例に生じているように思わせる一般化と、医療機関や製薬会社の経営戦略を誇張した暴露話である。医療関係者のコメントを散りばめて、記事の内容の信用度を高めようとするとレトリックが巧みで、読者に不安を煽り考える余地をなくしている。記事を読んだり週刊誌の新聞広告を見たりした人は当然心配して診察時に質問が相次ぎ、そのたびに彼らの不安を取り去らなければ

ならない。そんなに発行部数を上げたいのか、記事には何か意図されたものがあるのかなどと憶測し、一方的に流される情報が疑いもなく信じられてしまう世の中に危うさを感じる。だがこの種の情報は案外早く淘汰されるのも常であり、医師は患者を信じ誠意をもって臨床現場で時間の過ぎ去るのを待つしかない。

一方、医療側からの医療情報の発信の媒体や内容は多岐にわたっている。JRや地下鉄のプラットフォームや車内の広告、街の電柱の医療機関の看板と様々である。新聞やラジオ・テレビやインターネットでも紹介や広告を目にすることもしばしばである。地下鉄やバスでは「内科消化器科・内科専門医の〇〇胃腸科へは2番出口が便利です。腰治療の専門医・何々整形外科にお越しください」とアナウンスが聞こえてくる。

専門医と評される医師が、読者の健康上の不安に答える新聞や雑誌の健康相談の反響は大きい。健康を扱うテレビ番組は視聴率が高いらしく、権威と言われる医師が断定的と戸惑うくらいの見解を述べる場面もあり、日本の医療情報は玉石混濁である。

専門医の質を担保し、患者から信頼される医療情報の良い指針となり、「公の資格」として広く認知と評価される新専門医制度は、地域医療崩壊の加速が懸念される理由のため、開始が一年延期となった。専門医も情報的一种であり、医師の優劣や差別化が目的ではない。専門医は医師にとって全人的な医療への道半ばの通過点であり、国民にとって受

診する際の一つの情報として理解されるべきであろう。

先日映画「FAKE」を観た。聴覚障害のある作曲家佐村河内守と妻を映像対象としたドキュメンタリーである。彼が発表した交響曲は実は贋作で、ゴーストライターがいた疑いが明るみとなった。その後メディアや世間から猛烈なバッシングを受け、結局釈明会見まで開かれたことは記憶に新しい。しかし真相は明らかにされないままであった。

終了前のシーンは噂通り衝撃的で戦慄的であった。観劇後は誰かにあらずじや興奮を伝えたく仕方がなかった。世の中の何が真実なのか嘘なのか、それを判断する自分自身に自信がなくなり不安になったからである。ドキュメンタリーといえどもファインダー越しにカメラを回す時にはもうすでに意図的であるには虚を突かれた。

医師は積み重ねられた知識や経験を前提にして診療するが、医学の世界でもパラダイムシフトが起こったり、正しいと信じられていた医学知見が覆ったりする。週刊誌に書かれているように、文献や医学講演会によって提供される医学情報の中には執筆者や演者や製薬会社の様々な思惑が隠されていないわけではない。

情報には何らかの意図がある、中立的第三者機関は額面通りには機能しない、情報発信に完全な公平や中立の立場は難しい、新聞やテレビ報道は必ずしも事実ではない。そう疑ってばかりいては世界を信じられなくなり、とても生きてはいけない。しかし残念ながらそう思わざるを得ないことばかり世界では起こっている。何が大切な情報で何が不要なのかを決めるのは最終的には誰なのか。今回の記事や「FAKE」は、自ら疑問を持ち考えたりテラシーを学ぶ機会となった。